

# パスカルの《アポロジー》の

## プラン復元に関して (II)

竹下春日

### I Lafuma の主張について

われわれはまず、パスカルの《アポロジー》のプランにかんする Lafuma の主張を検討してみたい。すなわち、第一写本優先説を採る Lafuma はいかなる根拠により、『第一写本』にみられる諸断章の配列をもって上述のプランを表示するものとしたかを調べ、われわれ自身の立場から、その主たる論拠を批判考察してゆきたい。

(一) 「Filleau de la Chaise による『パンセに関する講話』は、1917 年に『第一写本』にしたがって書かれたものである。つまり、この講話は、1670 年版 [ポール・ロワイヤル版] を準備する任務を帯びた同版編集委員会が、かくあったものと想像した『アポロジー』の復元を、おそらくは叙述したものである。」<sup>(1)</sup> パスカルと同時代の人々が『第一写本』に《アポロジー》のプランの表現を看取したであろう事実は、Lafuma 説を外観上裏附けるものである。しかしこのことは、Lafuma と編集委員とがその見解を一にしたに留まる。Lafuma は『第一写本』中の分類綴 (liasses) の写しをもって、プランの表示と考えたが、われわれの前回の研究はこれを速断と看做した。そうしてわれわれの研究は、『第一写本』中の未分類断章群こそ、プランの内容をよりよく反映するものであることを実証した<sup>(2)</sup>。われわれの立場からすれば、Lafuma のいわゆるプランなるもの、また委員会の考えたプランなるものは、パスカルの講話が行われた当時のプランにすぎない。これと、未分類の断章のうち最後のものが書かれた時点におけるプランとが、同一であるか否かは未だ不明である。これが同じものであるとするには、証明を要する。パスカルが在世中その最終プランの内容を確言したとする文献は、存しないのである。

(二) 「われわれはさらに次のようにおもうのだ、つまりこの分類 [第一写本の] が、1656 年から 1662 年にいたる間に書かれた宗教に関する断章全体の 50

%以上を示しているからには、この分類なるものはたんに一個の下書ではないということである<sup>(3)</sup>。」Lafuma がこの文中で「この分類なるものはたんに一個の下書ではない」Ce classement n'est pas seulement une ébauche……と述べることによって、彼が強く暗示していることは、この分類がパスカルのプランを実際に示す重要な意義をもつ下書だということである。しかし Lafuma の論拠は、十分ではない。『第一写本』において分類されている断章（われわれのいわゆる Classé）の数は総数の過半数を占めるとはいえ、パスカルの意図からみると、未分類断章（われわれのいわゆる Non classé）の数は現に残されているものを遙かに上廻るはずであったことは、明らかだからである。すなわち《パンセ》のポール・ロワイヤル版序文中に、われわれ次の叙述を見出すのである——「これを完結するには、健康状態の十年間を要すると、氏〔パスカル〕はしばしば語っていた……<sup>(4)</sup>」。文中の「これ」は《cet ouvrage》を指し、これは事実上パスカルの意図していた《アポロジー》にかんする著作を意味するものである。パスカルが著述を企図しはじめたのは、Lafuma によれば1656年<sup>(5)</sup>であり死亡したのは1662年である。したがって執筆期間は最大限7年間であって、10年間にはなお3年間不足である（しかもこの10年間なるものは健康なる10年間である）。それゆえ未分類断章の総数が既存のものを超えるはずであったことは、疑問の余地がないのである。

㊦ 「パスカルが病気のゆえに、その分類作業の中断を余儀なくされたからには、未分類の断章紙葉は、缺を入れたものと否とを問わず順次これを配置して、同一主旨の下に既存の27章を補足充実することを、何故人はせぬのであろうか。この未分類の断章紙葉こそは、さきの27章と関連するものであるというのに。以上のごとくすることは、パスカルが直接意図したものを出来るだけ尊重することではあるまいか。彼パスカルは、じつに宗教にかんする著述のために、草稿文書を作製しつつあったのである。……上記のことを果すのが、われわれの実現せんと試みたことなのだ<sup>(6)</sup>。」、「かくしてこの過酷な重病というものこそ、なぜ Copie 9203〔第一写本〕の191頁から472頁までの間に、諸テキストよりなる33個<sup>1)</sup>のシリーズが相接して見出されるかという、その理由を説明するものである。このシリーズたるや、タイトルもなければ明瞭な順序もなく、1659年1月以前に書かれて裁断された草稿紙葉<sup>2)</sup>や裁断されないもの、またこの時点以後における紙葉をも一括してふくむのである<sup>(7)</sup>。」最初の引用文を通じて、われわれはパスカルの作業過程の物理的状态——裁断され糸と針を使って綴られたもの（分類綴 liasses）・裁断されてはいるが綴られていないも

の(未分類の草稿紙葉)・書き込まれただけで裁断されていないもの(同前)——に基づいて、Lafuma がすべての草稿したがって断章が liasses の形ちで分類される筈であったと看做していることを知るのである。究極において、すべてが分類綴(リヤス)となったであろうことは、容易にわれわれの想像しうるところである。しかし、ここには問題が存する。なぜなら、すべての断章がリヤスに編成されるとしても、Lafuma の言うがごとく『第一写本』に存するタイトルそのもの、これらタイトルへの諸断章の配属関係ならびにリヤスの順序がそのままパスカル自身によって厳守される予定であったとは、断定することが出来ないからである。われわれが、物理的状态の外観に眩惑されないなら、こうした疑問を払拭することはできない。特に未分類断章群(Non classé)を核心とみるわれわれの立場からは、そうである。前回のわれわれの研究成果によれば、Classé(既分類断章群)は非重要断章群ないし補足的断章群というべき性格のものであり、したがって少なくともその一部分がプランから除去される可能性があることを、われわれは見逃しえないのである。

(四) A. Bayet の所説に対する Lafuma の反駁。Lafuma によれば、Bayet は次のごとく述べている——「彼〔パスカル〕の生涯も末に近づくと、幾何学や理性、『記号』『数学の』さえも彼は嘲けるのだ。心情を通じて神の許へと往くこと、そうして十字架の愚かのうちに去私無自となること、こうしたことを彼は望んでいる。これらは、彼のノートのうち直ぐさま見られることなのだ<sup>(8)</sup>。」「……まさに有名なる諸頁、しかもわれわれには深遠とおもえるこれらの諸頁こそは、狂愚非凡の士のために書かれた狂愚非凡の言辞として考えられねばならない<sup>(9)</sup>。」「1660年には、全面的変化が起る……彼は科学的探究を忘却することだけに満足しない、彼はこのものの非を宣告する……無信仰の道を何処までも止ゆみ続けることは、不可能なのだ。」<sup>(10)</sup> こうした Bayet の所説に対し、Lafuma は次の論述のうちで、「歴史的叙述」を意味せしめるとともにいささか侮蔑的な「この物語」cette histoire という語を使用しつつ、次のごとき実証的論考を展開する——「だがこの物語のうちには奇妙な事柄が存するのだ。つまりそれは、1660年以降狂愚非凡の人々に対する同じく狂愚非凡の士として、パスカルが自らを遇していることを証明すべく選出された諸テキストの大半が、1656年、1657年、1658年にパスカルによって書かれたものだということである。」<sup>(11)</sup> また Lafuma は、この時期には、パスカルが「科学的精神によって満ちていた」<sup>(12)</sup> ことを附言している。

Lafuma による実証的反駁は、Bayet 説における論証の手続の弱点を、見事に

突いている。しかし、ただそれだけである。パスカルの晩年になって、《アポロジー》のプランが変貌したかも知れぬという Bayet の言わんとする内容そのものは、依然として反論されぬまま残っている。なぜなら、1660年8月にパスカルはフェルマ宛書簡のうちで、次のごとく述べているからである——《……たんなる幾何学者にすぎぬ人間と熟練した職人とでは大した違いはないものと小生は決めて居ります。それほど幾何学は無益な代り物と愚考致しておる次第です。》<sup>(13)</sup>、《小生は、この精神〔幾何学の精神〕からまこと隔絶致した研究に身を置いて居ります。このため件の精神なるものは殆んど忘れておったという始末です。》<sup>(14)</sup> Lafuma は後に述べるように、《序言》(La. 48~49)の内容の不易をもって、プランの変更のありえなかつた所以を説いているが(II参照)、この《序言》なるものは、パスカルの叙上の心境の変化を否定しうるほどの詳細なる叙述を含むものではない。したがって、この問題に対しては、別の論証を必要とするのである<sup>(15)</sup>。

## II われわれの見地について

われわれは I において、Lafuma の主張に対して否定的批判を加えて来たが、しかし彼の所説中にはわれわれにとって極めて有意義なる研究成果を見出しうるのである。これはその実証の単純簡明なるゆえに、却って有力なる説得力を持つものである。Lafuma は次のごとく言う——「……以上の記述は、さらにわれわれに対して次のように考えることを許すものである。つまり、それはかなり流布した意見とは反対に、パスカルがその著作の大略をポール・ロワイヤルの講話以前にあって一度び決定するや、もはやこれを変更しなかつたということである。これを確かめるには、分類された断章 (La. 29)<sup>(16)</sup> と未分類の断章 (La. 48~49)<sup>(16)</sup> とを比較するだけで十分である。前者は分類されているがゆえに 1659年1月以前に書かれたものであり、後者はわれわれの意見によれば 1661~1662年に書かれたものである。これらの諸断章は、準備中の著作〔アポロジー〕を、事実非常に明瞭に大きく二分しているのである。」<sup>(17)</sup>この引用文中の La. 29 は《1. Partie., 2. Partie.》; La. 48~49 は《Préface de la première partie.》, 《Préface de la seconde partie.》という小見出しを持つものであり、したがって両者の内容の一致ないし酷似は Lafuma の主張を裏付けるものであると、一応言うことができよう。次の引用文もまた、同様である。「『第一写本』の目次によれば、パスカルは la Nature est corrompue. と題する一文書を予定していたのである。ところで彼はこの草稿用紙には、何も書き入

れていないのだ。しかしわれわれは、未分類の草稿紙葉中にこのタイトルを有する二個の断章を見出すのであり、しかも *Ordre* と題する別の断章が以上を暗示していることも、また知るのである。<sup>(18)</sup>

Lafuma の実証は、パスカルの《アポロジー》のプランに本質的変化がなかったということを示している。しかし、形式上はまったく同一なのではない、そこには量的差異が見出される。すなわち第一に、*Non classé* に所属する断章 (La. 48~49) のほうが、*Classé* の断章 (La. 29) より、内容上詳細である。Ed. du Seuil において、前者は約 52 行あり、後者は 4 行余にすぎない。次に直前の引用文中の事実も、*Non classé* が *Classé* より詳しいことを示している。第三に、有名な《賭》の断章 (Br. 233) も *Non classé* 中に存する。第四に、1661—1662 年代に書かれたと見られる 26 個の断章のすべてが、*Nonclassé* に属している。これらの事柄は、*Non classé* が前回の拙論において述べたごとく、「*Non classé*こそは本格的執筆へ一段と近づいた下書である」ことを示すものである。最後にわれわれは、次の重要事を指摘しうる。『第一写本』中の *Classé* を Brunschvicg や Michant はポール・ロワイヤル版刊行の便宜上作製されたものと考え、*Non classé* は編集委員会が刊行本より除外を意図していた諸断章と判断したのであるが、Lafuma はこれを検討した結果、ポール・ロワイヤル版の全断章 (391 個) 中のじつに過半数 (207 個) が *Non classé* より選択収録されている事実を発見したのである。<sup>(19)</sup>この事実は、われわれの *Non classé* 中心主義にとって、極めて注目すべき意義を有している。なぜなら、パスカルの甥 Etienne Périer はポール・ロワイヤル版の《Préface》において、次のごとく述べているからである——「われわれは、沢山のパンセのうちから、この上なく明瞭で一番まとまっていると思われるものだけを採り上げたのである。」<sup>(20)</sup>したがってわれわれは、*Classé* よりも *Non classé* のほうが「この上なく明瞭で一番まとまっている」*les plus claires et les plus achevées* パンセをより一層多く含むことを知るのである。そうしてこれこそはまさに、*Non classé* が *Classé* よりも、一歩進んだ下書であることの証左であり、直前に述べられたことはすべて、こうしたことの一部を示すものにほかならない。こうして前回の広義における構造主義的方法の成果と今回の文献学的方法のそれとは、相補的な一致を完全に示すことにより、Lafuma の *Classé* 中心主義に対するわれわれの *Non classé* 中心主義の立場を、一段と強化するに到ったのである。

### III 諸家の見解について

Lafuma の業績を Victor Cousin ならびに Faugère のそれに匹敵するものとみる Mesnard<sup>(21)</sup> は、パスカルのプランに関し次のごとく述べている、「パスカルによって始められた分類を斟酌しないということは、道理に合わぬことであろう。彼が後になってこの分類を変えようとしたのだと仮定することを許すどんな徴候もない以上、ますますそうなのだ。」<sup>(22)</sup> Mesnard のいわゆる「パスカルによって始められた分類」le classement commencé par Pascal とは、Lafuma のいわゆる『第一写本』の分類を指すのであり、したがって Mesnard も Lafuma 同様、われわれのいわゆる Classé 中心主義の立場に立つものである。殊に彼が、パスカル自身による分類の変更を示すなんらの徴候も存しないと言う時、われわれはこの感を深くするのである。しかし Mesnard は、分類の変更があり得なかったということに対する彼自身の検討の実際的内容ないし論証を提示してはいない、ただ結論だけが示されているにすぎない。おそらく彼は、Lafuma の考証(I, IIにおいてわれわれが見たところの)に基づいて、かくは述べたものであろう。それゆえわれわれの Lafuma に対する批判は、大略 Mesnard にも妥当すると言えよう。

Lafuma と Tourneur の研究成果を考慮しつつ<sup>(23)</sup> ポール・ロワイヤル版の序文の執筆者の一人 Filleau de la Chaise の叙述(Discours sur les Pensées de M. Pascal) を基礎にして、J. Chevalier は彼自身の独自の《パンセ》の分類を提示している。彼が Filleau の記述を基礎にする理由は、次のごとくである——「ところで、われわれが Filleau によって伝えられたパスカルのプランなるものを『第一写本』のみならずパンセの草稿、特に、パスカルが二つの説明に利用した A. P. R. なるタイトルをもつ断章 483——Filleau こそはこれら二個の説明にかんする回想というものを、われわれに保存しておいて呉れたのだが——と突き合わせてみると、就中次の事実を勘考してみると……<sup>(24)</sup>、両テキストの一致は完璧だとおもわれるのだ。そうしてパスカルの意図や順序それから説明のためのプランそのものさえ、驚異的明瞭さをもって立ち現われて来るのだ。」<sup>(25)</sup> かように Chevalier は Filleau の《Discours》と『第一写本』および A. P. R. なるタイトル付きの断章(Ch. 483~Br. 317)の三者の内容的一致をもって、その立場の根拠としているのであるが、われわれ自身の立場から観るとき、次の難点を有する。つまり、Chevalier のいわゆるパスカルの分類およびプランなるものは、パスカルが行った講話当時のもの、言い換えれば『写本』の示す分類が成立した当時のものにすぎないのである。なぜなら Filleau の《Discours》はパスカルの講話の回想であり、Chevalier の示す A. P. R. の断

章はまさに『第一写本』の分類に応ずる *liasse* 中に含まれているからである。したがって Chevalier のいわゆるパスカルのプランなるものは、われわれのいわゆるプラン（諸断章中最後のものが書かれた当時のプラン）とは論理上直ちに同一視しえないからである。両者を同一であるとするためには、なお論証の手続きを経なければならないのである<sup>(26)</sup>。

「Lafuma 氏の著書のうちで一番批判を招き易い部分は、『アポロジ』に当てられたパスカルによる未分類の 356 個に達する断章を〔既分類の断章中に〕配分したことにありということ、明らかだ。」<sup>(27)</sup> かく批判する Mantoy は、分類順序は Lafuma に従いながらも、既分類断章のみを専ら重要視すべきことを主張して、次のごとく述べている——「次の事は注目に価する。つまり、極めて稀な例外は別として、重要なもろもろの章句というものはパスカルによって分類された部分のうちに見出されるのだ。本書の後段において、われわれは既分類断章を専らと言ってよいくらい引用してゆくことにする。こうしても体系づけるわけではない。最も特色のある章句を求める段になると、ほとんど何時も既分類の断章中に見つかるという始末なのだ。」<sup>(27)</sup> かくよりに Mantoy は、「重要なもろもろの章句というもの」*les passages importants* すなわち「最も特色のある章句」*les passages les plus caractéristiques* が既分類断章群 (*Classé*) に多いことをもって、この断章群が未分類断章群 (*Non classé*) より重要であることの論拠としている。しかし「重要である」ということは、この際パスカル自身にとって重要であるということではなければならない。「最も特色のある」ということも、同然である。Mantoy ないしわれわれ自身にとっていかに特色あり、いかに重要であろうとも、それは直ちにパスカル自身にとって特色あるもの、重要性を持つものとは言い難い。このためには、なお証明を要する。だが Mantoy は、これにかんする問題意識をすら示していないのである。しかも既に述べたごとく (II)、意味の明瞭な形ちのまとまった断章は *Non classé* により多く見出されること、裏から言えば *Classé* 中には *Non classé* に比して未完の断章が多い事実こそ、われわれは注目しなければならないのである。

次に Gouhier は, Filleau および Périer の手になるポール・ロワイヤル版の序文はいずれもプランの手掛りとしては不十分であること、また A. P. R. のタイトルのついた断章も講話の内容を示すとおもわれる分類綴全体と十分に照応的ではないこと、さらに分類綴の内容とタイトルとが必ずしも密接とは言い難いこと、および分類綴の順序も不可解の点があること等を指摘した後<sup>(28)</sup>、彼は草稿紙の客観的状态から出発する。すなわち、或るテキストに他のテキスト

を指示する覚え書があること、分類綴を作ったとき出来た針の穴や大型紙を裁断したこと、これらの事実を根拠として、Gouhier は Lafuma 説を一步押し進めるのである。「手書本 9, 203 [第一写本] の冒頭にみられるタイトルの一覧表が、草稿の集録を小分けした最初のもを表示しているとするべき場合に、かつまたこうした小分けから内容的に秩序のある全体がプラン通り出来上っているものとすべき正にこうした場合に、肉筆の別のテキストなるものが未分類の紙葉となって見出されるのだ。言い換えれば、分類がプランを意味するからこそ、プランを示す一覧表のある集録の部分を除く一切が分類されてはいないのだ。そこから、ラフュマ版にみられる根本的な区分、つまり『第一写本の既分類の紙葉』と『第一写本の未分類の紙葉』との別が生じてくるのである。前者の紙葉は 27 個の分類綴を表わし、後者は編集者が 33 個のシリーズにこれを配分している。」<sup>(29)</sup> さらに Gouhier の所説を敷衍すると、彼は「内的分類」*classement intérieur* と「外的分類」*classement extérieur* とに分類そのもの（パスカルによる）を区分している<sup>(30)</sup>。前者は Lafuma のいわゆる既分類を指し、後者は未分類を意味しているのである。そうして引用文に見られるごとく、Gouhier は内的分類をもってプランを表示するものとしている。Gouhier は直接述べてはいないが彼が言わんとするところは、おそらく次のことである。既分類と未分類の二つが存在するのは、何んらか自然発生的なものではないということである。例えば Lafuma の説くごとき、病気による分類作業の中断が叙上の状態をもたらしたのではないということである。かかる二種類の草稿状態は、じつにパスカル自身の意志が加わった結果——分類せんとするパスカルの意図から生じたもの、である。だからこそ既分類と未分類の二種類は、パスカル自身による《*deux opérations distinctes*》なのである(註 30 参照)。こうした Gouhier の見方を考察すると、そこには内的分類=プランの表示、未分類=非プラン(補足)の表示という等式が見受けられる。だがわれわれの立場から観るとき、Gouhier の論理は時間的要素を無視している。Lafuma によれば、既分類のものはすべて 1658 年末以前に執筆されたものであるが、未分類の 33 個のシリーズ中少なくとも 10 個は 1659 年以後に書かれたものである<sup>(31)</sup>。しかも未分類の紙葉も、われわれの眼にそう映ずるだけであって、パスカル自身の脳裏には整然たる配置が予定されていなかったとは、何人も断言しえないのである。したがって 1659 年以後プランの変更が全くありえなかったことを、われわれは到底確言できないのである。かくて Gouhier の所論は彼の意に反して、かかる変更を念頭においてプランの不変更を立証すべく努力した Lafuma 自身よりも、



一步後退したものと言わざるをえないのである。

Gouhier と同じく Lafuma の第一写本優先説の立場に立ちながら、前者に対立する者に P. Ernest がいる。Gouhier が、既述のごとくポール・ロワイヤル版の二つの序文 (Filleau の《Discours》と Périer の《Préface》) と A. P. R. のタイトルを持った断章との三者は、パスカルのプランの手掛りとしては不十分であることを主張したのに対し、Ernest は三者にかんする詳細な比較検討の末、三者の同調一致を結論する——「結局のところ、……われわれはこれら相互に『独立した』三個の資料において、同一無二の弁証論的歩調というものの三重の表現を発見するのだ。つまり、この三個のテキスト中には同一弾道の同一曲線図が見られるわけだ。この均斉、この相似こそはそれゆえ、パスカルの『アポロジ』を描き出す唯一にして無二の『初めて放たれた』弾道<sup>(33)</sup>のために、万丈の気を吐くものである。」<sup>(33)</sup> Ernest の文章が示すこの自信と自負にもかかわらず (註 32 参照)、結局は Chevalier に対するわれわれの評言が彼にも妥当することは明らかである。したがって改めて評するまでもあるまい。

以上われわれが観て来た諸家のうち、Lafuma を除くすべてが、『第一写本』の Classé が成立した当時におけるプランをもって、そのまま Non classé のプランと見做していることは、両プランの差異の可能性に対する問題意識をすらしばしば欠いている事実と相俟って、独断の譏りを免れるものではあるまい。Lafuma について言えば、われわれは彼の Classé 中心主義を理論上まったく否定し去るものではない。なぜならわれわれの立場からするも、かかる事態は可能であるからである。すなわち、Classé 中心の分類形態は、Non classé 中心の分類形態の一つの場合として成立しうるのである<sup>(35)</sup>。しかしこれは、あくまで可能性にとどまる。Lafuma の基本の方針が正しいか否かは、今後におけるわれわれ自身の研究につれて、自から分明になることであろう。(完)

#### 〈注〉

- (1) Louis Lafuma, Controverses pascaliennes, Paris, 1952, p. 18.
- (2) 駒大外国文学研究 (第 4 号), 拙論「パスカルの《アポロジ》の復元に関して (一)」参照。
- (3) L. Lafuma, Histoire des Pensées de Pascal, Paris, 1954, p. 32.
- (4) Blaise Pascal, Pensées sur la religion et quelques autres sujets, Introduction de L. Lafuma, Editions du Luxembourg, Paris, 1951, t. III (Documents), p. 139.
- (5) Lafuma によれば、正確には《1656 年 9 月》である (Histoire des Pensées de Pascal, p. 25).

- (6) Lafuma, *Recherches pascaliennes*, Paris, 1949, p. 99—100.
- (7) Lafuma, *Controverses.*, p. 47.
- 1) 最も新しい刊行本 (Editions du Seuil, p. 493) では 34 個に分け直されている。
- 2) ただしこのうちには, 《Miracles》なるタイトルを持つ三個のシリーズが存する。これは聖荊の奇蹟に対する攻撃 (イエズス会士 Annat による) を反駁するために執筆された書簡の下書である (この書簡は実現するに到らなかった)——*ibid.*; Lafuma, *Histoire.*, p. 91. なお Lafuma によれば, このシリーズの一部は《アポロジ》に利用される可能性を持ったものである。
- (8) *Controverses.*, p. 81—82.
- (9) *ibid.*, p. 82.
- (10) *ibid.*
- (11) *ibid.*, p. 83.
- (12) *ibid.*
- (13) Pascal, *OEuvres complètes, Présentation et notes de L. Lafuma*, Editions du Seuil, Paris, 1963, p. 282.
- (14) *ibid.*
- (15) この問題については, われわれは既に別稿で論じている。その晩年を通じて, パスカルは Bayet の言うが如く「理性」*la raison* を全く否定し去ってはいない。したがって科学的研究の価値を無視していたのではない。書簡中に見られるごとく《たんなる幾何学者にすぎぬ人間》*un homme qui n'est que géomètre* を否定しているにすぎないのであり, 宗教的実践の意義と効果を有する科学研究までも否定しているのではない (駒大外国文学研究, 創刊号, 拙論「パスカルの《Honnête Homme》について」参照)。なお 1661—1662 年に書かれた断章のうち Br. 195 には, 次のごとき叙述が存する——《かほどまで見易いものは, 皆無だ。したがって理性の原理に従うと, これらの人たち〔真理の追求に無関心な人々〕の行為なるものが, 別途を往くのでないとしたら, まったく不条理だということも, 何にもまして明白なことだ。》かようにわれわれはこの断章において, パスカルが《理性の原理》*les principes de la raison* を一応認めていることを, 明瞭に看取しうるのである。——この断章は, Lafuma のいわゆる Série III に所属しているが, Série III は彼の考証によれば, 1661—1662 年に書かれたものである (Voir *Recherches.*, p. 65—66)。
- (16) これらの断章の Ed. Brunschvicg における番号付けは, それぞれ次の通りである——Br. 60 ; Br. 62—242.
- (17) Lafuma, *Histoire.*, p. 25.
- (18) Blaise Pascal, *l'homme et l'oeuvre* (Cahiers de Royaumont, Philosophie N°I), Paris, 1956, p. 84. ——引用文中の三個の断章は Br. 546, Br. 439, Br. 449 である。

- (19) Recherches., p. 24—25.
- (20) Pascal, OEuvres complètes (Ed. du Seuil), p. 498.
- (21) J. Mesnard, Pascal, l'homme et l'oeuvre, Paris, 1956, p. 138.
- (22) *ibid.*
- (23) J. Chevalier, OEuvres complètes de Pascal (Bibliothèque de la Pléiade), 1954, p. 1085.
- (24) この省略された部分に、われわれが〈補注〉で引用する Chevalier の叙述が入って来るのである。Chevalier の言わんとするところは、断章 483 [Br. 317] の前書、結論は詳細に書かれているが、本質的部分は簡略であり、この簡略な重要部分にこそ Filleau の記述の内容が巧く当てはまるのだ、ということにあると思われる。
- (25) *ibid.*, p. 1086.
- (26) Chevalier は Lafuma, Mesnard の意見に従って、分類綴 (liasses)——これは『第一写本』の分類と一致している——を、パスカルが行った講話 (ポール・ロワイヤルにおける) の原稿とみなしている。しかしこの講話が実際に行われたか否かは断定しえない (前回拙論注 12 参照)。しかし何れにせよ, liasses の存在は事実であるから、これらがパスカルによって作られた当時のプランとわれわれのいわゆるプランとの異同こそ、われわれにとって至大の重要性を有する問題と言わなければならない。
- (27) J. Mantoy, Des “Pensées” de Pascal à l’“Apologie”, Paris, 1955, p. 16. 引用文中 Non classé の数字 (356) がわれわれの数字 (R=348——補注参照) と異なるが、これは次の理由による。Mantoy の数字は『第一写本』およびその他の未分類断章の数字であるが、われわれのは Lafuma の Ed. Delmas に拠っている。われわれは、同版所収の断章のうちパスカル自身によって「抹消」rayé されているもの (6 個) を省いた。また、Lafuma は『第一写本』中で二個に分けられて筆写されているもので、内容上は明白に一個と確認できるものを、同版では一断章と看做して分類している (かかるものは二例存する)。本文中の二番目の引用文も *ibid.*, p. 16 による。
- (28) H. Gouhier, Blaise Pascal, Commentaires, p. 173—182.
- (29) *ibid.*, p. 182.
- (30) *ibid.* ——Gouhier は 《classement intérieur et classement extérieur sont deux opérations distinctes,……》と述べている。
- (31) Lafuma, Recherches., p. 66.——10 個のシリーズとは III, IV, V, IX, X, XVI, XXVI, XXVII, XXXVIII, XXX であるが、なお VI, VII, VIII もおそらく 1659 年以後のものと推定されている。
- (32) 『初めて放たれた』弾道 la trajectoire *initiale* とは、パスカル自身が始めて描いて見せたプラン (『第一写本』中の既分類の全体が示すもの) を意味するとともに、

Ernest 自身の著述 (la trajectoire pascalienne de l'Apologie なるタイトルをもつ) をも暗に誘示するものである。

- (33) P. Ernest, la trajectoire pascalienne de l'Apologie, Paris, 1967, p. 49. なお Gouhier に対する批判は、同書 p. 57—58 に見出される。
- (34) これについては既に前回拙論 I の末尾で述べられている、その際 Lafuma の配分が不合理であることも指摘されていた (今回の補注参照)。

〈補注〉——前回の論稿において、数字上の錯誤があったので、ここで訂正しておきたい。A=145, B=71~72, B/A=49~50 %; A'=231, B'=70~73, B'/A'=30~32 %; P=376, Q=141~145; R=348, S=78~85, S/R=22~24%; X=317, Y=104~107, Y/X=33~34%; X'=407, Y'=115~123; Y/X-Y'/X'=3~6 %。以上の外は元通り。したがって B/A-B'/A'=17~20 %, Q/P-S/R=14~17 %。それゆえ断章の配分率は 14~20 %となる (前回の数字は 15~22 %)。しかしこの数字の変更は、われわれの結論に変化をもたらすものではない。

断章配分は Non classé 全体が二つの部分に分れることを前提としているが、この前提そのものは本文 II において述べられた Lafuma の論証によって明らかであろう (La. 29 と La. 48—49 との比較)。最後に次のことを附言しておきたい。前回におけるわれわれの考察は、タイトル・小見出しのある断章群が断章全体の中で占める割合 (パーセンテージ) は、重要断章群においてよりも、非重要断章群において多いということを基礎としていた。これはパスカルが非重要事項に対しては記憶を助けるために詳記する傾向があったことを示すものである。そうしてこのパスカルの傾向は、A. P. R.<sup>1)</sup> というタイトルを持った断章 (Br. 317) にもみられる。この断章の特徴について、Chevalier は次のように記している——「この断章では、前書と結論だけはパスカルによって詳しく開陳されているが、その説明の本質的部分は数語で指示されているにすぎない……」<sup>2)</sup>。かようにわれわれは、パスカルのノートにあっては、重要事項は簡単に、非重要事項は詳細にメモされる傾向があったことを知るのである。

1) これは普通 A Port-Royal の略字と解されているが、パスカルのポール・ロワイヤルにおける講話の史実性は、前述のごとくこれを断定し難い。しかも A. P. R. の A. は省略点が存することから、これを前置詞 A と看做すことは出来ないとして、最近 Ernest は次の三種の読み方を提案している——《Apologie (à) Port-Royal》, 《Apologie Pour (la) Religion》, 《Apologie : Prosopopée (de la) Religion》 (P. Ernest, la trajectoire pascalienne de l'Apologie, Paris, 1967, p. 11).

2) Chevalier, OEuvres complètes de Pascal, p. 1086.

〈附記〉——Lafuma の断章番号はすべて Ed. Delmas のそれである。(注了)